

短編集

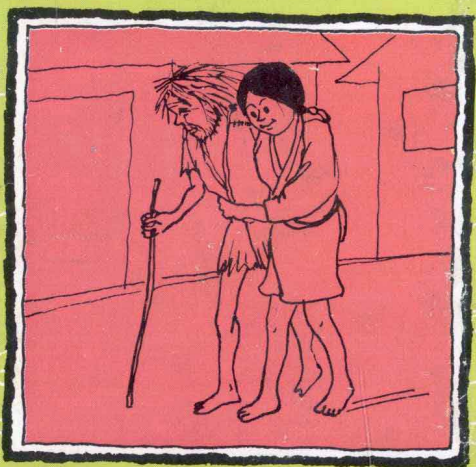
おふゆ捕物帳

とり

もの

ちよう

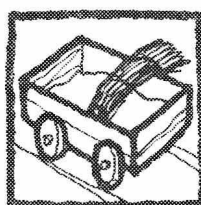
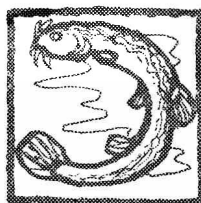
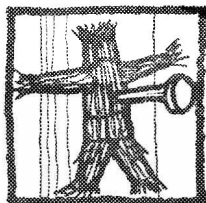
かつおきんや 作 / 戸井昌造 画



短編集
おふゆ捕物帳

とりものちよう

かつおきんや作
戸井昌造画



N. D. C. 913/216P/22cm

かつおきんや作品集

13

■おふゆ捕物帳■

一九七六年四月一〇日 初版発行

著 者 かつおきんや

発行者 東 政 彦

発行所 株式会社 アリス館牧新社

東京都新宿区筆筒町四一 大崎ビル
電話(二六九)二〇八一—四

印刷 図書同朋舎

製 本 大日本製本紙工

・乱丁本・落丁本はおとりかえいたします

©Kinya Katsuo 1976 Printed in Japan
(分) 8393 (製) 08013 (出) 0144



吉助きちすけのしり

67



おふゆ捕物帳とりものぢやう

29



どじょう

1



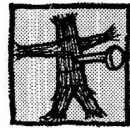
太^た三^さ郎^{ぶろう}のゆめ

157



鈴^{すず}

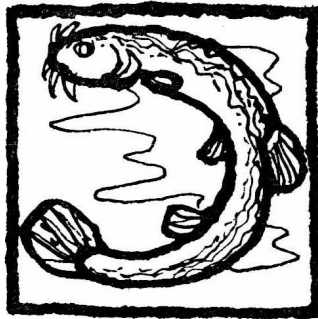
137



肝^{きも}だめし

109

ど
じ
ょ
う



おらの名は弥助。金沢の町からすこし北へはずれた、二宮村の百姓の子や。

あの日は、つゆの最中やった。朝、ととが町へ野菜をうりにいくのにいっしょにこいというもんで、子どもは子どもなりにかごに青ものをのせてでかけたがや。

町へ野菜をうりにいくのは、おらの家ばかりでない。村の者はよくでかける。町に近い西念やら北村やら若宮村、豆田村の者らとも、町でよくであうことがある。うりにいくというても、かならず買うてもらえる、料理屋とか大店とかをおとくにもっとる者は、めったにおらん。村でも、えらいさまだけや。おらたちは、町の中をふれてあるくこともあれば、人通りの多い香林坊の橋づめとか、浅野川のかげづくりとかで、道ばたに荷をひろげてうることもある。

さむらいの屋敷の並んどうる町をうってあるくことは、ほとんどない。ただだまって通りすぎるくらいのもんや。塀ばかりつづいてひっそりしとって、人通りもすくないし、あんまり気分のよい所じゃない。そのくせ、だまって通りすぎるおらたちを、どこでみとるもんか、それとも待ちうけておってでてくるのか、きゆうによびとめられることがある。おらたちは、そんなとき、

「へい。あんやとごぜえみす。」

と、わざとでかい声でいうけど、心じゃ、ちっともうれしゅうない。かならず、その人らは、
「この大根は、すがはいつとる。」

とか、

「この菜なっぱには虫の卵たまごがよけいついとる。」

とか、けちをつけて安く買かおうとするからや。おらたちもそんなこといわれるとだまって
おられんさかい、一言二言、ことばをかえすと、

「百姓ひやくしやうのくせになまいきな。」

という。けちのくせしていはるんや、さむらいの奥おくさんたちというものは。そうやさかい、
おらは、さむらいもすきでなけりや、さむらいの町もすきでない。

おらが金沢かなざわでいちばんすきな所といえ、浅野川あさのがわ大橋おおはしのあたりや。大橋のこっちがわに
あるかけづくりという町のにぎやかなこと。人通りも多ければ、店屋も多い。ひろい通り
をさまざまな人がかたをぶつつけあうようにしてあるいとるし、なにをうる店でもある。
いつやったら、と、につれられていったら、

「たぬきのきん玉のさしみやぞう。」

と、いせいのよいあんちゃんがどなっとった。おらがみにいこうとしたら、と、にしから

れたけど、ひよっとしたら、へちまかひょうたんのきざんだものでもうとったがかもしれん。風もないのにぶらぶらしとるものやさかい。

ところが、ととは、おらがいちばんすきなかけづくりへ野菜をうりにいくのは、そんなやさかい、いかんという。あそこじゃ、場所をとるのに、顔がないとだちやかん（だめだ）という。もしも場所がとれても、場所代が高うて、ちよっこりももうけにならんというんや。顔がないとだちやかんなんて、まるで、おらのととは顔がなくて、頭からじきに首になつとるか、それとも目も口も鼻もない、のっぺらぼうみたいな方や。

そんなわけで、香林坊の橋づめへいくことが多い。ここは一年一年にぎやかになつてきとるのやさうな。さむらい屋敷の町にくらべたら、くらべもんにならんほどにぎやかや。その日も、香林坊へいくがやと、でかける前にとが、かにかにいうのをきいて、「なんか、よいことがありますように」と、おらは口の中でつぶやいた。ねがいごとをするときは、べろで鼻の頭をなめながら口の中でいえばよいんやさうな。死んだじいじがいうとった。なにか、めずらしいものをみることができるともしれんし、もしもひょうしがよかったら、かえりにあめをかうてもらえるかもしれん。それでおらは、かにかに、「うんとつんでくれ。たんとかついでいって、全部うってくるさかい。」

と、はりきっていうた。いもうとやらおとうとが、目を丸うしてみとったさかい、よけいにおらははりきっておった。

金沢は百万石のお城がまん中にあり、東に浅野川、西に犀川と、二つの川が流れとる。そのそれぞれに大橋が一本だけ、かかつておる。香林坊の橋というたら、犀川から水をひきいれた鞍月用水にかかるとる橋で、長さ六間半(約十二メートル)、はば四間(約七メートル)ほどや。大橋とはくらべもんならんけど、金沢の町の中の橋ではでかい方や。

その橋の川下の方のたもとに、柳の木が五、六本、だらんとたっておる。その下に荷をおろし、もってきた大根、そろえ菜、にんじん、さといも、せり、みつ菜、ふき、ごぼうなどを並べたてた。いつもは三人ほど並んで青もの店をひろげるのに、きょうは、おらたちだけやった。そのかわり、魚をうる浜の者が三人ほど、まだ荷をひろげておった。金石や大野の漁師が朝早うからきてうっとって、いつもは、おらたちがくるころにはもどっていくのやけど、きょうはまだおった。かれい、やら、あじ、やら、名まえのしらぬ赤い魚やら、黒い魚やらがあつた。たこもおつた。

きょうはひどくふつた雨も、きょうは、ときどきパラパラッとふるくらいやった。待つとるうちに、すこしずつ人通りがふえ、ぼつぼつうれた。浜の者たちが荷をたたんでかえ

ったあと、ひるごろになると目だって人出ひとでが多くなり、よううれた。

そのいそがしがひとくぎりして、ほっとしたときやった。おらの前に、はかま姿すがたの足が止まった。そして、頭の上で声がした。

「おい。うれとるか。」

声といっしょに、酒さけのにおいが、フーッとかぶさってきた。よっぱらいのさむらいや。おらはぞーっとなりながら、おそるおそるみあげた。赤い顔をした若いさむらいやった。さっきから、すぐ前の茶店で、

「めでたいなあ。めでたいぞ。」

と、ひとりでいうて酒さけをのんどったさむらいやった。どこかでみたことがあるような顔やったけど、思いだせずにいた。うっかり目がおうて、もんくでもいわれたらこまると思うて、おらは、すぐうつむいて、じっとしておった。その目の前に、さむらいのはかまがあった。あまり上等のものではなく、すそがすれておった。そういえば、はいておるげたもすっかりちびておる。

おらのとなりで、ととは、自分の荷にの前のお客きやくさんに、大根かなにかをわたしながら、ちらっちらっ、おらの方をみているらしかった。おらは、さむらいがなんの用かと思



ながら、目をふせたまま、しばらくじっとしておった。

でも、そのさむらいは、なんの用もなかったらしく、かた足をじくにして、ぐるっとまわってむこうむきになった。なったとたんに、ぐらっとよろけて、おらの上へたおれそうになった。

「あつ。」

おらはびっくりして両手を前につきだした。しかし、さむらいは、わざとよろけてみせたのか、すぐにからだをたてなおし、前へよろけるように二、三步あるいて、顔だけおらの方にむけた。

「ハッハッハッ。おどろいたろう。」

笑うたときにえくぼがへこみ、白い歯がみえた。それをみたとたん、

「ああ。あのときのさむらいや。」

と、おらは思いだした。一月ぐらい前、やはりとと町へ野菜うりにでたかえり道やった。武蔵が辻をすぎて、升形へきたとき、げたのはなおがきれてこまっておる女の子がかった。どこかの店で働いとして、お使いのとちゅうらしかった。おらが、なにかひもないかなあと思うとったら、さむらいが通りかかり、ふところから手ぬぐいをだしてひき

さいて、じきにたててやった。そのさむらいが、たしか、今のさむらいやった。

おらは、とくに話しかけた。

「とと。ほら、あのさむらい、こないだの……。」

しかし、ととは、低い声でおらにいうた。

「いらんこと、いうもんでない。」

と、ピシッとおさえつけるようないい方やった。よっぱらっとるし、かわりをもったらいかんと思うとるらしかった。

そのさむらいは、そのまま、ふらっ、ふらつとよろめきながら、橋の方へあるいていった。男の人が三人ばかりそのそばを通りすぎた。その次に、むこうがわ、南町の方から、若い女の人がひとり、小僧をつれてあるいてきた。髪かみの形から着物からも、どこかの店のむすめさんらしかった。さっさとあるいてきたその女の人が、橋の上につたっておるさむらいのそばを通りぬけようとしたとき、さむらいはぐらっとその人の方へたおれそうになった。さっき、おらにしてみせた、あんなぐあいや。ところが、女の人

「キャアッ！」

と、おらたちがドキッとするくらい、高い声をはりあげた。そして、その「キャア」とい

つしよに、はいておった足駄あしだをかた方、ポーンととばしてしまい、やっとらんかんにつか
まった。

さむらいは、

「ハッハッハ、おどろいたかあ。」

と、その女の人にいうた。女の方はまっ青さおになって、すくんでおる。さむらいは、
「なんじゃ。まるで、せっしやを鬼おにか天狗てんぐかと思うとるような目じゃな。」

というて、いきなり両手を上にあげ、

「ウオーッ！」

とやってみせた。若い女わかの人は、もう一度、

「キャアッ！」

と、もっとけたたましい声をあげると、もう一方の足駄あしだもけとばして、橋をころげわたっ
た。小僧こぞうが、

「おじょうさん、待ってください。」

と、ころがった足駄あしだをかけまわってひろいあげて、あとをおっかけた。

「おい、足駄あしだをひろう小犬、しっぽがみえんぞ。ワンワンワン。」

と、さむらいは、らんかんにもたれて、笑うとった。

その女の人は、おいついた小僧に、

「なにをぐずぐずしとるがいね。のろま。」

とどなって、頭をコツンとたたき、どろのついた足のまま足駄をはいて、ブンブンしてあるいていった。小僧は泣き顔でついていった。おらは、あのさむらいがその女の人をもつとこわがらせてやればよかったのにと思ふとった。

そこへ今度は、なにかの職人らしいじいじが、孫らしい七つか八つほどの女の子をつれて通りかかった。女の子はじいじと手をつないであるいてきて、橋のまん中で、たつておるさむらいをみると、ピクツとなった。すかさず、さむらいが両手をあげた。

「ボワワーリャア。赤鬼やぞう。」

指をいっばいにひろげ、口もせいっぱいにあけておどしてみせる。

「じいじ。」

と、女の子はじいじのそでをつかんだ。それでも、にげようとはせず、じっとさむらいをみつめておる。じいじはさむらいに、

「これはよいごきげんで。つゆばらいに一ばいおやりでございますな。」

というと、女の子の方をみて、

「かたい者になつとるか、アマメハギさまがきいてござるがやぞ。」

アマメハギというたら、能登で正月に鬼の面をつけて家をまわる者たちや。女の子は、
「なつとるよ、わたい。」

とはっきり答えて、じいじといっしょに橋をわたっていった。

「そうじゃ。わしはアマメハギじゃ。いうこときかん子は、くうてしもうぞう。」

と、さむらいは、あるいていく二人のうしろから、また大声でいうた。女の子はちらっとふりかえると、

「アカンベエ。」

をして、あるいていった。

「いやあ、まいった、まいった。」

さむらいは、いかにもうれしそうにしておった。なんとしっかりした子やろうと、おらは思うとった。

こうなると、もう仕事どころではない。おらの目はそっちばかりにむく。おらだけではない。そういえば、茶店の中からもさむらいの方をながめとる者もおる。橋のたもとで客